

FD・SD

Faculty Development

Staff Development

2017

成城大学

Activity Report

はじめに：副学長／FD・SD小委員会委員長ご挨拶

新任教員研修会

学生授業評価アンケート

コンピテンシーニーズ調査の実施報告

FD・SD講演会

「大学基準協会による第3期認証評価の変更ポイント
—内部質保証の実質化に向けて—」

FD・SD講演会

「STEMからSTEAMへ ～エンジニアリングデザインの発想～」

各学部のFDへの取り組み

ピアチューターに係るSD活動報告

2018年度活動計画



学生を懸命にさせる教育をめざして



はじめに

副学長
教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員長

杉本 義行 教授

FD活動が10年目を迎えるにあたって

昨年度の本学のFD・SDにかかる事業は、おかげをもちまして無事に実施することができました。皆様のご協力とご理解に感謝申し上げます。

すでにご案内のように、本学のFD活動が全学的に開始されてから10年目を迎えました。これまでにFD活動は、①授業評価アンケート、②新任教員研修会、③FD講演会の3つの柱として進められてきましたが、FD・SD小委員会では、10年目にあたりこれらの活動の見直しを図り、改善案について検討してまいりました。その結果、これらの活動の柱は基本的には変更しないものの、FD活動の核となっております『学生授業評価アンケート』について大幅な見直しを行いました。

具体的には、まずその名称について授業改善のためという目的を明確化するために『授業改善アンケート』とすること。第2に、これまでの質問項目については、より内容が明確となるように文言の修正を行うこと。第3として当該科目の授業手法とその科目を受講したことによる資質・能力の成長に関する質問項目を新たに追加したこと。以上の3点について、改訂いたしました。

改訂に際しての基本的なスタンスは、学習者である学生の視点に立つということです。教員が意図する授業方法について、受講した学生の目線ではどのようにとらえているのか。またシラバスには当該授業科目の到達目標として、身につけてほしい知識、スキル、態度などについて記載されているわけですが、それらがどの程度身についたのかに関する学習者の立場からの情報は、次年度に向けての授業改善の上でおおいに参考となるものと期待されます。

10年間の学生授業評価アンケートのデータは、本学にとって大きな資産であるといえます。今回、質問項目の改訂をきっかけにして、これまでに蓄積されたデータを用いて、長期データでみる時系列での傾向の分析をはじめとした、より多くの知見を得るための深い分析の試みもIR推進室を中心に進行中です。分析の成果につきましては、今後、新たに

企画しておりますIRレポート(仮称)等を通じて教職員の皆様と共有を図りたいと思います。

昨年度に義務づけられたスタッフ・ディベロップメント(SD)に関しては、ピアチューター育成のための研修における教職員の参画について取り上げ、今回、その事例紹介について執筆していただきました。このプロジェクトは、ピアチューター育成を目的としたまさに教職員のPBL(課題解決型学習)と捉えることができ、教職員の資質・能力の育成を図るSD活動であるからです。

最後に、今後の活動の方向性として3点を挙げたいと思います。

第1は、高大接続に関することです。昨年度もこの場で申し上げたように、高校の学習内容や教育方法が大きく変化しております。先進的な高校では、身につけるべき資質・能力として21世紀スキルを明確に打ち出したり、教育目標として国連で決議したSDGs(持続的開発目標)に貢献できる人材育成を掲げる高校があります。その目標を達成するためのカリキュラムとして「探究学習」を重視する学校が増えています。探究学習は、まさに大学での学びに直結するものだけに、探究学習における高大接続のあり方について、本学でも引き続き検討する必要があるかと思えます。

第2は、授業方法などの具体的なスキルアップに役立つ情報提供に関する活動です。昨年度に刊行された『授業カタログ』はグッドプラクティスの共有という観点から有益であるにご好評をいただいております。今後も引き続き、授業ですぐに役立つインストラクショナルデザインの知見などについてのワークショップなどを実施して参ります。

第3は、FDやSDに関連した情報の皆様へのご提供ですが、これに関しては不十分であると反省しております。ホームページの作成などで改善したいと考えています。

FD・SD活動について、教職員の皆様からのさまざまなご意見やご要望を賜れば幸いです。

新任教員研修会

新任の先生方に一日でも早く本学をご理解いただき、円滑な教育活動を始めていただくための一助として、毎年新任教員研修会を開催しています。2017年度は4月8日(土)に、専任教員は13:00~16:45、非常勤講師は13:15~16:00の時間帯で行いました。

参加状況は、専任教員は対象者6名全員(文芸学部1名、法学部1名、社会イノベーション学部2名、国際センター1名(特任准教授)、キャリアセンター1名(特任教授))、非常勤講師は49名のうち34名が参加されました。

専任教員・非常勤講師共通スケジュール

| 内容 | 担当 |
|--|--------------|
| ・研修説明 | FD・SD小委員会委員長 |
| ・挨拶 | 学長 |
| ・成城大学の沿革 ・これからの取り組み(学園創立100周年に向けて、第2世紀ビジョン) ・ミッション・ビジョン ・自己点検・評価と認証評価等 | 学長 |
| ・授業に関することについて 学則、学年暦、休講・補講、欠席届、公欠、教室使用・教室変更、機材設置、聴講生・科目等履修生、他学部聴講等 ・Campus Square for Webについて 受講者名簿、成績入力等 ・試験、レポートについて 定期試験、追試、再試、試験施行内容登録等 ・成績について 成績評価・開示(評価分布含む)・問い合わせ制度等 ・シラバスについて 記載必須事項等 ・学生授業評価アンケートについて 実施要綱等 | 教務部 |
| ・ハラスメントについて | ハラスメント防止委員会 |
| ・特別な支援を必要とする学生について | バリアフリー委員会 |
| ・非常時(火災・地震等)の対応について | 企画調整室 |
| ・教育研究用ネットワークとその利用について ・情報関連設備、外国語教育設備、教材作成設備とその利用について ・e-learningツールとその利用について | MNC |
| ・図書館現地視察 図書館の概要・利用方法について ・他大学利用状況等 | 図書館 |



学長による本学の沿革、取り組み等に関する解説



各担当者からの説明の様子



図書館現地視察の様子

専任教員にプラスした内容



| 内容 | 担当 |
|--------------------------------|---------|
| ・成城学園の建学の精神 ・教育理念等について(DVD) | 教育研究所 |
| ・教員業績システムについて | 総務課 |
| ・科学研究費助成事業について ・特別研究助成費について | 研究機構事務室 |

非常勤講師にプラスした内容



| 内容 | 担当 |
|-----------------------------------|---------|
| ・非常勤講師控室現地視察 非常勤講師控室の利用方法について等 | 非常勤講師控室 |

学生授業評価アンケート



2017年度は、全学的な学生授業評価アンケートを大学、大学院の全科目を対象とし、前期、後期の2回実施いたしました。実施状況は、実施任意科目も含め、2,581科目中2,149科目(実施率83.3%)でした。

アンケートの集計結果は、Campus Square for WEBで学内公開し、別途、科目別集計表を各科目担当者へ、大学全体集計表、科目開設部門別集計表、授業形態別集計表を学長、学部長、研究科長、共通教育研究センター長、国際センター長、キャリアセンター長へ報告いたしました。

また、アンケート集計結果の概要および集計結果に対するコメントは大学ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

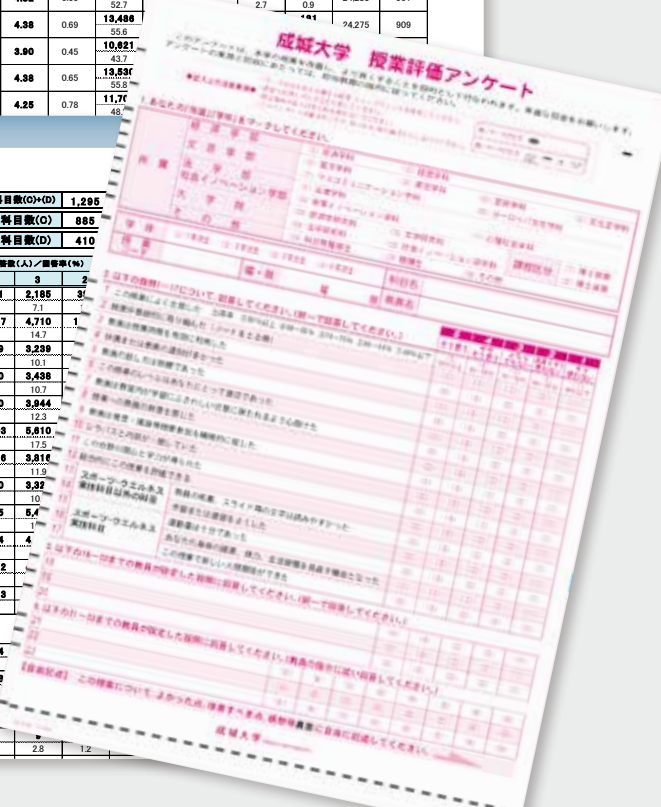
2017年度 前期 授業評価アンケート集計結果

成城大学

| 対象 | 大学全体 | | 実施対象科目数(A)+(B) | 855 | 実施科目数(O)+(D) | 805 | 延べ履修者数 | 37,144 | | |
|----|---|------|-------------------|---------------|--------------|-------|--------|--------|-----------|------------|
| | | | 実施必須科目数(A) | 552 | 実施科目数(O) | 546 | 延べ履修者数 | 25,184 | | |
| | | | 実施任意科目数(B) | 303 | 実施科目数(D) | 259 | | | | |
| 取組 | 項目 | 平均値 | 調査12ヶ月中の 実施科目数 | 割合数(A)/割合率(%) | | | | | 有効 回答数 | 評価・ 評価数 |
| | | | | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | |
| 1 | この授業によく出席した 出席率 ⑤90%以上 ④89~80% ③79~70% ②69~50% ①49%以下 | 4.80 | 0.16 | 10,591 | 4,475 | 1,028 | 328 | 138 | 23,156 | 2,028 |
| 2 | 授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等) | 4.18 | 0.42 | 10,872 | 9,328 | 3,877 | 902 | 389 | 24,246 | 938 |
| 3 | 教員は授業時間を有効に利用した | 4.58 | 0.61 | 13,445 | 7,384 | 2,498 | 582 | 333 | 24,240 | 944 |
| 4 | 休講または教員の遅刻が多かった ※2 | 4.28 | 0.21 | 1,114 | 1,514 | 2,479 | 3,308 | 15,728 | 24,201 | 983 |
| 5 | 教員の話し方は明確であった | 4.22 | 0.64 | 12,200 | 7,149 | 3,218 | 1,018 | 514 | 24,195 | 989 |
| 6 | この授業のレベルはあなたにとって適切であった | 4.07 | 0.63 | 9,888 | 8,110 | 4,889 | 1,242 | 382 | 24,267 | 917 |
| 7 | 教員は教室内で学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた | 4.32 | 0.65 | 12,803 | 5,277 | 3,028 | 662 | 208 | 24,283 | 901 |
| 8 | 授業への教員の熱意を感じた | 4.38 | 0.69 | 13,488 | 5,561 | 2,711 | 614 | 209 | 24,275 | 909 |
| 9 | 教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した | 3.90 | 0.45 | 10,821 | 4,371 | 2,133 | 814 | 355 | 24,275 | 909 |
| 10 | シラバスと内容が一致していた | 4.38 | 0.65 | 13,531 | 5,561 | 2,711 | 614 | 209 | 24,275 | 909 |
| 11 | この分野の関心と学力が得られた | 4.25 | 0.78 | 11,371 | 4,861 | 2,431 | 581 | 261 | 24,275 | 909 |

2017年度 後期 授業評価アンケート集計結果

| 対象 | 大学全体 | | 実施対象科目数(A)+(B) | 1,544 | 実施科目数(O)+(D) | 1,295 | 885 | | | |
|-----------------------|---|------|-------------------|---------------|--------------|-------|-------|--------|--------|-------|
| | | | 実施必須科目数(A) | 900 | 実施科目数(O) | 885 | | | | |
| | | | 実施任意科目数(B) | 644 | 実施科目数(D) | 410 | | | | |
| 取組 | 項目 | 平均値 | 調査12ヶ月中の 実施科目数 | 割合数(A)/割合率(%) | | | | | | |
| | | | | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | |
| 1 | この授業によく出席した 出席率 ⑤90%以上 ④89~80% ③79~70% ②69~50% ①49%以下 | 4.58 | 0.17 | 21,058 | 7,981 | 2,185 | 371 | 1,214 | 48,467 | 2,149 |
| 2 | 授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等) | 4.20 | 0.43 | 14,427 | 11,417 | 4,710 | 1,171 | 411 | 48,467 | 2,149 |
| 3 | 教員は授業時間を有効に利用した | 4.37 | 0.62 | 17,749 | 9,889 | 3,239 | 811 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 4 | 休講または教員の遅刻が多かった ※2 | 4.29 | 0.23 | 1,247 | 2,070 | 3,438 | 5,438 | 10,111 | 48,467 | 2,149 |
| 5 | 教員の話し方は明確であった | 4.27 | 0.65 | 16,858 | 9,590 | 3,944 | 1,011 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 6 | この授業のレベルはあなたにとって適切であった | 4.12 | 0.65 | 13,538 | 11,103 | 5,010 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 7 | 教員は教室内で学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた | 4.35 | 0.65 | 17,180 | 10,216 | 3,811 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 8 | 授業への教員の熱意を感じた | 4.42 | 0.70 | 19,998 | 9,880 | 3,221 | 811 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 9 | 教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した | 3.99 | 0.46 | 14,859 | 7,725 | 5,411 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 10 | シラバスと内容が一致していた | 4.39 | 0.67 | 17,880 | 9,484 | 4,111 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 11 | この分野の関心と学力が得られた | 4.29 | 0.79 | 18,017 | 10,782 | 4,111 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 12 | 総合的にこの授業を評価できる | 4.38 | | 17,838 | 10,113 | 4,111 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| スポーツ・ウェルネス実技以外の科目のみ回答 | | | | | | | | | | |
| 13 | 教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった | 4.21 | 0.62 | 11,838 | 7,214 | 4,111 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| 14 | 予習または復習をよした | 3.99 | 0.42 | 8,848 | 8,242 | 2,111 | 1,111 | 311 | 48,467 | 2,149 |
| スポーツ・ウェルネス実技の科目のみ回答 | | | | | | | | | | |
| 15 | 運動量は十分であった | 4.73 | 0.40 | 259 | 59 | 12 | 12 | 12 | 48,467 | 2,149 |



「学生授業評価アンケート」が生まれ変わります! ~2018年度からは「授業改善アンケート」へ~

「学生授業評価アンケート」は本学で実施してから約10年が経ち、エンロール・マネジメントを視野に入れたIRでの調査・分析も必要であることを見据え、見直しを図りました。名称のみならず、質問項目の見直しや新設等を行い、新たに「授業改善アンケート」へ生まれ変わりますので、今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

アンケート集計結果はWeb上で公開しております。▶



コンピテンシー ニーズ調査の 実施報告

学内報告会の様子



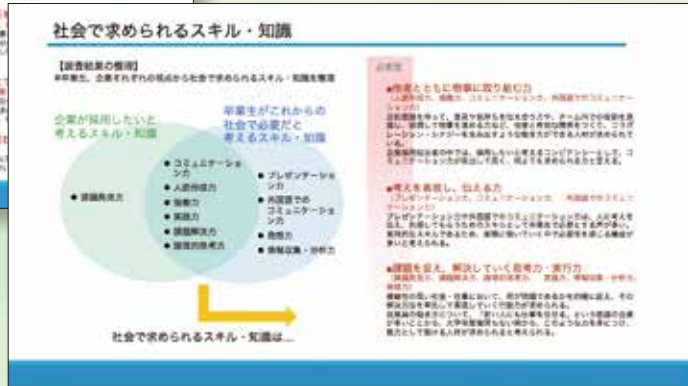
企業の採用担当者および本学卒業生に対し、2017年8月から9月にかけて、コンピテンシーニーズ調査(企業アンケート調査、卒業生アンケート調査)を実施しました。

本アンケートは、これから求められる、あるいは大学生活で身につけたコンピテンシー(態度・価値観およびスキル・知識)等についてのアンケート調査であり、その分析を通じて、本学において、学生が身につけるべきコンピテンシーを明確化することを目的として行いました。

企業アンケートは、本学卒業生を採用している企業等(1,000社・機関)の採用担当者を対象とし、有効回収数は240、回収率は24.0%でした。アンケートの回答では、**本学の卒業生は「誠実性」、「気配り」、「親しみやすさ」といった『対人関係に関わるコンピテンシー』がよく身につけていると評価された一方、『何が問題・課題かを捉え、解決していく思考力・実行力』の評価は比較的低いことが分かりました。**

また、卒業生アンケートは、卒業5年・8年後の本学卒業生(1,600名を抽出)を対象とし、有効回収数は331、回収率は20.7%でした。アンケートの回答では、**大学時代に身につけた態度・価値観として、「気配り」「知的な好奇心」「チャレンジ精神」「主体性」など積極的な活動に関わる項目が挙げられ、同じく大学時代に身につけたスキル・知識としては、「コミュニケーション力」「協働力」「人脈形成力」が上位に挙がりました。**

本調査の結果は、レポートとしてまとめるとともに、2017年12月21日には学内報告会を実施し、36名(大学教員21名、職員15名)の参加がありました。このほか、FD活動の一環として、各学部教授会にて個別の報告会を実施し(経済学部:2018年1月16日、文芸学部および法学部:1月31日、社会イノベーション学部:1月17日)、情報の共有化が図られるとともに、組織的な教育改善を促進する機会となりました。



調査から得られた結果イメージ

※資料をご要望の方は教育イノベーションセンターにお問合せください

FD・SD講演会

大学基準協会による 第3期認証評価の変更ポイント —内部質保証の実質化に向けて—

講師 工藤 潤氏 (大学基準協会事務局長 大学評価・研究部長)

日時 2017年7月11日(火) 午後6時～7時30分

学校教育法改正に伴い、2004年以降わが国の大学は文部科学大臣の認証を受けた評価機関による評価を7年以内の周期で受けることが義務づけられました。これを認証評価制度と呼び、本学は2008年度および2015年度に評価機関である大学基準協会からの大学評価を受けています。

2018年度からの第3期認証評価においては、「大学教育の質を保証する第一義的責任は大学自身にある」という点から、大学が内部質保証システムを構築し有効に機能させているかどうか重視されるようになります。具体的には、各学部・研究科等による教育プログラムの自己点検・評価の実施を前提に、大学の執行部がその教育活動をどのように捉え、どのように改善に関与しているかが評価されるようになり、全学的観点からの内部質保証が重視されるといえます。

次回、本学は2022年度に大学評価を受けることとなりますが、この度は大学基準協会事務局長の工藤潤氏をお招きして、自己点検評価委員会との共催によるFD・SD講演会を実施しました。

工藤氏からは、2018年度からの第3期認証評価の変更ポイントについて、「内部質保証の推進に責任を負う全学的組織」の設置や関連する規程の整備、内部質保証のための全学的な方針の策定、学習成果の検証システムの確立についてなど、具体的かつ丁寧にご説明いただきました。

当日の参加者は28名(内訳は下表参照)となり、盛会のうちに終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

FD・SD講演会参加者内訳

| 所属 | | 人数 |
|----|------|-----|
| 学内 | 大学教員 | 18名 |
| | 職員 | 10名 |
| 計 | | 28名 |



講演内容をWeb上で公開しております。



FD・SD講演会

STEM から STEAM へ ～エンジニアリングデザインの発想～

講師 美馬 のゆり先生 (公立はこだて未来大学 教授)

日時 2018年3月24日(土) 午後4時～5時30分

AI時代を生きるために、いわゆる理数系教育であるSTEM(Science, Technology, Engineering and Mathematics)教育が、大学のみならず、小・中・高等学校においても注目を集めています。プログラミング教育はその一例といえます。

成城学園は、教育改革の3つの柱の一つとして「理数系教育」を掲げていますが、大学ではその一環として、2015年度より日本IBMとの連携により全学共通教育科目に「データサイエンス科目群」を開設しました。データといっても数値だけでなく、自然言語や画像、動画をも対象とするデータサイエンスはまさに文理融合分野であり、単なるSTEMではなく、芸術(Art)を加えたSTEAM教育をめざすべきとの議論もあります。

この度の講演会では、学習科学(認知科学、学習環境デザイン、情報工学)・科学コミュニケーションがご専門で、中央教育審議会委員としてもご活躍されている美馬のゆり先生をお招きし、“人文社会科学系”大学におけるSTEM教育のあるべき姿などについてお話しいただきました。

本講演会は学外の教育関係者、学生、一般の方も参加対象者として広く参加を募ったところ、60名(内訳は下表参照)の参加があり、盛会のうちに終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

FD・SD 講演会参加者内訳

| 所属 | | 人数 |
|-------|-----------|-----|
| 学内 | 大学教員 | 9名 |
| | 中学校高等学校教諭 | 3名 |
| | 初等学校教諭 | 1名 |
| | 職員 | 7名 |
| 学外参加者 | | 40名 |
| 計 | | 60名 |



講演内容をWeb上で公開しております。



各学部のFDへの取り組み1

経済学部におけるFD活動の一例

「フレッシュャーズ・セミナー」の新設と運営

経済学部

三枝 大修 准教授

「ミクロ経済学入門・演習」、「マクロ経済学入門・演習」、「データ解析入門」など、FD活動を織りこむかたちで運営されている授業は他にもあるが、本稿では、2017年度に新設された経済学科の専門選択科目「フレッシュャーズ・セミナー」についてご紹介する。

この科目は、2017年度、2018年度とも前期の同一曜限に4コマが開講されており、担当者は(授業コード順に)庄司匡宏先生、杉本義行先生、山重芳子先生、油井雄二先生。配当は経済学科の1年生のみであり、1クラス20名程度という定員があるため、履修希望者は入学直後の4月初旬に「志望理由」などを書いて選考を受けることになる。経済学部では2年次から4年次までの3年間でゼミナールが必修なのだが、本科目はいわばその「新入生向けバージョン」だ。あるいは、本学関係者であれば、「WRDの経済学部版」といった方がわかりやすいかもしれない。

ただし、「フレッシュャーズ・セミナー」の狙いは、WRD(書く+読む+議論する)、プレゼン、グループワークといった、大学での学習活動の基本的な所作・技術の習得にはとどまらない。というのも、各クラスの担当教員には、自身の専門領域と絡めながらいくつかの具体的なテーマを提示し、新入生に「経済学とはどのような学問か」を伝えることも期待されているからだ(例えば、開発経済学がご専門の庄司先生の授業では、「途上国の貧困問題」や「日本の災害復興」といったテーマが設定され、履修者もそれに沿うかたちでリサーチやプレゼンを行う)。そのため、科目名は同じだが、学習内容には必然的に担当者の独自色が出るし、授業方法についても——グループワークやプレゼンの課される頻度、ディベートやレポート課題の有無など——クラスごとに少なからぬ違いが出てくる。つまり、主旋律だけは4クラスとも共通だが、それを自由に変奏するだけの裁量が各担当者に認められているのである。

もちろん、その「主旋律」を生み出すために、本科目の構想・設計の段階では相当数の教員がじっくりと時

間をかけて議論を行った。また、始動後の現在もなお、前期末には必ず4名の担当者が集まってミーティングを行い、クラス間の情報共有を徹底すると同時に、問題点を洗い出して授業の改良に努めている。FD活動の顕著な一例として、本稿がこの科目をとりあげる所以である。

なお、筆者が学生に対して独自かつ秘密裡に行った聞きとり調査によると、「フレッシュャーズ・セミナー」の評判はすこぶる良い。さいわい4クラスのいずれについても履修者の声を聞くことができたのだが、「もう一度履修登録をやり直せるとしても、やはりこの科目をとりますか?」と質問してみたところ、普段はおとなしい学生たちから「絶対にとります!」と威勢のよい返事がかえってきて、思わずのけぞってしまった。また、現1年生だけではなく昨年度(2017年度)の履修生も見つけて訊いてみたのだが、「去年受けたリサーチやプレゼンの訓練が、いま2年次ゼミで本当に役立っています」と評判は上々である。ただしこのセリフ、文字にしてみるとあまりにも優等生的に見えるので、「ただの社交辞令なんじゃないの?」とお疑いになる向きも多かもしれない。が、学生の表情や口調から判断して、どうやらそうではないのである。「否定的な意見でも遠慮なく言ってくれ」と強いて促してみても、出てくるのはせいぜい「1限だから早起きがつらい」程度。これには「ガンバレ」としか答えようがない。ちなみに、各クラスが第一希望として選択された理由は、「国際経済学に興味があったので、山重先生」、「シラバスを見て、プレゼン回数が他のクラスよりも多いみたいだったから、庄司先生」、「先輩からぜひとるようにと勧められたので、杉本先生」、「名前をググって見たら、ウィキペディアのページが出てきて、有名人っぽかったから、油井先生」などなど。

この科目、2019年度以降の増コマも検討されており、今後のさらなる充実・発展に向けた話し合いが進められている。

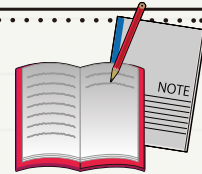
■山重芳子先生をはじめ、本稿の執筆にお力添えくださいました経済学科の先生方、ならびに「フレッシュャーズ・セミナー」の感想を伝えてくれた学生諸君に心より御礼申し上げます。

各学部のFDへの取り組み2

社会イノベーション学部

社会イノベーション学部におけるFD報告

社会イノベーション学部
加藤 敦宣 教授



社会イノベーション学部における教育改革の取り組みについて、FD活動との関連性でカリキュラム開発と学習支援システムの開発から、この場を借りて簡単に報告することにしたい。

2017年度入学者より実施されたのが、英語カリキュラムの更なる充実化と能力別クラス編制である。2017年度入学者より英語教育の更なる質的向上を目的として、1・2年次における英語科目12科目14単位を必修化した。また、これに並行して入学予定者には3月中旬にCASEC（英語コミュニケーション能力判定テスト）の受験を促し、英語能力を一律に測定することで、新1年次のクラス編制に活用している。

本学部ではさらに一步踏み込み、所属クラスと成績取得の分布に一定のキャップ（枠）を設けている。秀（素点：100～90）や優（素点：89～80）の成績評価は、配属クラスが上位になるほど修得可能性を高くし、下位クラスになるにつれ相対的に修得が難しくなるようにしている。成績の良否は次年度の奨学金受給条件とも関連するため、入学手続き時に送付する書類の中にもこの案内を入れ、入学予定者のみならず保証人の方々にも周知徹底を図っている。そのおかげもあり英語のクラス分けテストに際して、成績優秀者によるモラルハザードが生じなくなり、より適切なクラス編制と授業運営が為されている。

また、社会イノベーション学部創設10周年企画事業として開設された、「社会イノベーション特殊演習（2単位）」が2018年度で開講3年目を迎えた。今年度は日本RPA協会と富士通株式会社から講師をお招きし、RPA（Robotic Process Automation）とAIをそれぞれテーマに、密度の濃い授業を展開して頂いている。イノベーションの最前線で活躍されている実務家とのグループワーク（例えば、社会課題の発見、解決策の具体

的提案など）を通じ、履修者の1人1人は日々の理論的な学びと実践的な学びを結び付け、イノベーションに係わる学びをさらに深める機会を得ている。実際、昨年度は当該授業科目の履修者の中から2名の澤柳奨学金(*)受給者も出ており、カリキュラム・ポリシーに照らしても相応の教育成果を生み出している。交換留学生や認定留学生も多数輩出しており、学部カラーを体現した魅力的な専門科目の1つとなっている。

もう1つの教育改革としては、2017年度末をもって廃止された、卒業再試験制度が挙げられる。4年次生には程良い緊張感を生み出しており、就職活動に忙しいといえども、授業にしっかりと参加して勉強に取り組む環境作りが醸成されつつある。教務システムを通じた学部内全学生への周知徹底と、4年次生を担当される非常勤の先生方にもご連絡申し上げることにより、制度の実効性を担保するように努めている。

この他にも紙面の都合で詳細は割愛させて頂くが、授業科目の体系的なナンバリングの実施など、学部としての新しい取り組みが、既に幾つか実施されている。本学部も設置から14年目を迎え、3つのポリシーの実現については、一定程度の成果を収めつつあるように思われる。なお、本文執筆に際して、今後は「人材育成の目的」に照らし「社会に有為な人材を育成する」の部分について、様々な卒業生像を描けるようにすることも課題になる、とのご意見を頂戴していることを最後に触れておきたい。

*澤柳奨学金とは

成城学園の創立者である澤柳政太郎の精神を第2世紀に受け継ぎ、未来社会に貢献する有為な人材を育成するために、創立100周年である2017年度に新設された奨学金制度。

澤柳奨学金在学特待生は、2年次生以上に在籍し、人物・学業とも優秀な学生を対象に、当該年度の授業料全額もしくは一部に相当する額を給付する。

SDへの取り組み

ピアチューターに係るSD活動報告

本学では、正課外での取組として、多くのサポーター学生が、それぞれの得意な能力と個性を生かして主体的に学生や教職員へのさまざまな支援を行っている。団体としては、国際交流サポーター、就業力サポーター、バリアフリーサポーター、ライブラリーサポーターの4団体が活動しているが、学園創立100周年を迎えた2017年度には、新たにピアチューター制度を開始し、サポーター団体が一つ加わることとなった。

ピアチューター制度とは、自らの得意分野を持つ、一定の研修を受けた学生(チューター)が、学習者である他の学生(チューティー)に対して、質問や模範例示、行動示唆などを通じて、チューティー自らが、より良い学習方法や気づき・考え方を見出すことを促す学生相互の学習支援活動のことを言うが、本制度を導入することにより、学生が懸命に学び、自らの学習スタイルを確立し、自立することを促す教育的環境を整備することを目指すこととした。この制度が、他のサポーター活動と異なるところは、チューターには大学側で準備した研修を受けてもらうこと、また、教職員が学生に関与する度合いが大きく、教職員と学生とが一体となってピアチューター制度の運営にあたることである。本制度は、教育イノベーションセンター長、教務部長および図書館長で構成される「ピアチューター運営ワーキンググループ」が所管することとし、その下に「ピアチューター実施連絡会」(以下、「実施連絡会」という。教育イノベーションセンター職員3名、教務部職員4名、図書館職員3名で構成)を置き、本実施連絡会が日々行われる学生のピアチューター活動を支援することとしている。

以下、本稿では、実施連絡会の業務について、SD(ス



タッフ・ディベロップメント)の視点から報告したい。

ピアチューターは、2017年4月に募集を行い、総勢23名にものぼる学生から申し込みがあった。これら候補生に対しては、ピアチューター活動に必要な知識やスキルを学んでもらうため、約30時間にもおよぶ研修(下表参照)を実施した。

この研修では、外部のプロコーチを講師として招き、学習サポートに必要な傾聴・質問・評価(承認)などのスキルや、コーチングの基本となる「目標の明確化」「現状と問題の把握」「行動計画」「フォローと振り返り」などのステップ、また、アクティブラーニング型授業での支援を想定したファシリテーションスキルなどを学んだ。本研修には、毎回、実施連絡会のメンバーも参加し、学生と一緒にロールプレイを行ったり、さまざまなグループワークにも加わった。ロールプレイでは、3人一組となり、チューター・チューティー(学

<ピアチューター養成研修>

| | 構成 | 内容 | 日時 |
|---|---------------------------|--|------------------|
| 1 | ピアサポーターマインド & ミッション理解研修 | ・チームミッション定義 ・年間活動ステージ企画構成 | 5月13日(土) 13時~17時 |
| 2 | グループファシリテーション & 基礎コーチング研修 | ・対話型コミュニケーションスキル理解 ・個人、グループに対するファシリテーション基礎理解 | 6月17日(土) 9時~16時 |
| 3 | | ・意欲喚起、褒め、励まし、スキル理解など学習コーチングのあり方探究 | 7月15日(土) 9時~16時 |
| 4 | スタディスキルズ & ティーチング支援研修 | ・先行事例研究 ・スタディスキルズサポートの進行ポイント理解 | 8月 8日(火) 9時~16時 |
| 5 | | ・ケースメソッド学習&ロールプレイ ・テキスト、ツール準備 ・後期にむけたサポートプログラム立案 | 9月14日(木) 9時~16時 |

習者)・オブザーバーの3つの役割を交代で務め、相手の話にしっかりと耳を傾け、チューターの真意を引き出すための姿勢・方法、質問時におけるクローズド・クエスチョンとオープン・クエスチョンの使い分け、チャンクアップ(言葉の抽象度を上げる)・チャンクダウン(言葉の抽象度を下げて具体的な表現にする)の活用などを実践し、うまくできたかどうか振り返りを行った。振り返りでは、学生から職員に対し、「質問は上手でしたが、少し話しすぎたので、沈黙を怖がらずにもう少しチューターの話聞いてあげるとよいと思います」とのコメントがなされたり、「チューター役の際の悩みの話は本当のことですか」などの質問があり、職員が顔を赤らめる場面もあった。

グループワークでは、「本学ではどのような学習サポートが必要とされるか」をテーマとし、まず自分たちが困った・困っている点について話し合ったところ、「履修のガイダンスを受けても、何が何だか分からず、とても不安だった」「シラバスの冊子が廃止されて、見にくくなって戸惑った」「レポートの書き方を誰に聞いたらよいか分からなかった」「レポートにフィードバックがなく、何が悪いのかよく分からない」「授業で提出する感想は、皆どの位の分量で、どのような内容を書いているのだろうか」「授業で質問してもよく分からない」など、職員としては耳の痛い内容を含めた、さまざまな意見が出された。

このような内容のピアチューター養成研修は、職員にとって、1) コーチングなどのスキルは日常の学生窓口対応業務などにも大いに活用できる、2) 学生の率直な意見を聞くことで、業務改善に役立つ、などの意義があり、SDとしてたいへん有効なものとなった。

本研修の後、ピアチューターとなった学生は、2017年10月から本格的に活動を開始し、図書館における学習サポート(チュータリング)や学習に関する講習会(レポートの書き方講座、PC講座等)などに取り組ん



コーチングの
ロールプレイの
様子



グループ
ワークの様子

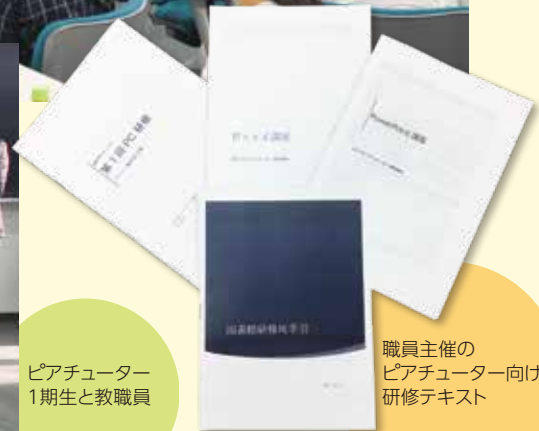
でいる。これらの活動にあたっては、月に一度の全体会(ピアチューター全員が参加)、2週間に一度のリーダー会(全体リーダーおよび各班リーダーが参加)を開催しているが、これらの会議には毎回、実施連絡会のメンバーも参加し、学生と課題や悩みを共有し、試行錯誤を重ねている。また、ピアチューターのスキルアップのために、職員が企画した図書館研修(図書館施設やOPACの利用支援を行うための研修)やPC研修なども開催しており、これらもSDの機会として機能していると言えよう。実施連絡会メンバーは、何よりピアチューター自身の成長を期待するとともに、今後も職員自身の能力開発に励み、業務改善に取り組んでいきたいと考えている。(文責:ピアチューター実施連絡会)



図書館研修での
職員による模範実演



ピアチューター
1期生と教職員



職員主催の
ピアチューター向け
研修テキスト

